

<http://ncbungaku2013.web.fc2.com/>

日・中文学翻訳館／趙清閣 #SE-17

2018. 6. 28



茅盾（1896-1981）は革命運動に加わった後、1928年に日本に亡命して30年に帰国。1937年に始まった日中戦争で上海が陥落すると香港に移り、日本軍が香港に入ると桂林に脱出し、日本軍が迫って来ると重慶に移って短編や戯曲を書き続けた。

はるどいと 春蚕の絲、未だ尽きず

3月22日の明け方、「茅公(茅盾)重病」という電報を受け取り、眠気が一瞬にして吹き飛んだ。心臓の鼓動が高くなり耳に聞こえてくるほどの衝撃だった。

数日前に茅公の息子の妻小曼から手紙が来て、「持病が出て茅公が入院した。病状は重くて度々人事不省に陥り、うわ言を言い、一日中酸素吸入に頼って点滴で生命を維持している。」と書いてあった。だが、私は楽観していた。茅公の病気は肺気腫なので命の危険はないだろう。これは老人にはよくあることで、私も同じような状態だった。毎年やっとな冬を越したかと思うと春節過ぎに心臓病（冠状動脈性硬化症）を発症した。

2月13日に茅公が手紙をくれた。これが彼からの最後の手紙になるとは！ 彼は私に、肺炎にかからないように、外出して風邪を引かないように、と忠告し、こう書いていた。「今年の冬は気管支炎にはまだかかっていませんが、昔一度肺炎を患ったことを思い出すだけで怖くなります。」

だれが想像できたろう？ 一か月前には彼はまだ健康だった。どうしてこのように病状が一気に悪化したのか？ ただ彼が高齢であることが気にかかり、会いたいという気持ちもあったので、良き師、良き友の教えをちょっと聞こうかと思い、すぐに北京に行くことにした。

23 日昼ごろ北京に着いて、午後に李棣華^①と一緒に北京病院に茅公の見舞いに行った。1979 年の冬と同じように彼は一階の病室にいた。彼はあおむけに寝て鼻には酸素吸入器のチューブが挿し込まれ、片手には点滴の瓶からの液体が流し込まれていた。とても痩せていたが精神状態は良く、目が生き生きと輝き、意識がはっきりとしていることがわかった。危篤という状態には見えなかったので思わず安堵のためいきをついた。

①李棣華(1905-1995)……革命運動家。抗日戦に参加、冀西の遊撃隊指導機関で教育顧問となり、1954 年から 75 年まで北京外国語学院の副校長を務めた。

茅公の病状について看護師に聞いたところ、この二日間は比較的安定しているということがわかった。私はこの上なく喜び安心した。茅公は遠方から見舞いにやってきた私を見るととても嬉しそうだったが、意外だという様子を見せた。見舞いに来ることを彼に知らせていなかったからだ。

私たちは以前のように文学談義を始めた。彼が最近送ってくれた旧作の『世界名著雑談』のことを話題にし、この本は世界の名作とその著者を正確に論評しているもので、私が若いときに欧米文学の名著に接するときにとっても役に立った。現代の若い人たちにとっても、読書をするときの良き指導書になるだろうと信じている、と言った。

彼はこれを聞くと謙遜して笑いながら言った。「あれは昔、生計を立てるために原稿料が欲しくて書いたもので、大したできではないよ。だけど、少しは若い人の助けにはなっていると思う。そうか、君はもう読んだことがあったんだね。」

彼は続けて「新中国になってからこの本は自分の『文集』には採られなかったし、重版もされていない。だから今回の重版は歓迎すべきことだと思っている」と言った。

私は彼の『回想録』の進捗状況を尋ねた。去年彼が手紙を書いてきたことを思い出したからだ。私たちは 30 年代と 40 年代に何回かいっしょに、ある文学活動を行った。彼はそのことについて書いていたが、記憶があいまいだから教えてほしい、というのだ。私もはっきりとは覚えていなかったが、彼のきまじめで何事もおろそかにしない厳格な執筆態度に感動し、彼の心情もよく理解できたので、懸命に記憶を呼び起こし資料として彼に提供した。

彼がどこまで書いているのかは分からなかったが、彼はとても焦っていて、少しばかり残念そうな口調で喘ぎながら言った。「書くのに時間がかかってね。30年代のところを書きはじめたばかりだよ。目も弱くなって、いつも病気になってしまう!」

私は急いで彼をなぐさめ、まずは体を治すことが重要で、健康が回復してから書いても遅くはないと言った。彼は疑うような目つきで私を見て、大きなためいきをついた。私には彼の気持ちがよく分かった。彼は春蚕 (はるご) ②のように、まだ最後の一本を吐き終わっていないので、安心できないのだ!

この時、私の目に涙がこみあげてきた。急いで窓のほうに向かい、緑の木の枝と曇った空を眺めた。私は黙って彼のために祈った。彼が全快するようにと祈った。天よ、一生をかけてこつこつと勤勉に文壇で耕作をしてきた老作家に健康を与え給え、我々の偉大な文豪の命を長らえさせてくれと祈った。だが、私の祈りが、残酷な死神を感動させることはなかった!

②春蚕……4月中旬に孵化した蚕のことを言い、繭の質、量ともに夏蚕、秋蚕よりも勝ると言われている。

26日の午前中、茅公の病状が悪化しているのではないかと感じた。だが意識はしっかりとしている。彼はあいさつをしたが、声にはならなかった。喘ぎ声がひどく呼吸するのも苦しそうだった。うめきながらしきりに点滴の瓶に目をやり、それを早くわきへどけるようにと看護師に求めた。私は、静かにして根気よく治療を続けたほうがいいと諭した。彼は首を振って言った。「もうだめだ、もうだめだ。」私は彼の苦痛の表情を目の当たりにした。それは私も経験した苦痛だった。

私はどれほど彼の苦痛を取り去ってやりたいと望んだことか。だが、私には手の施しようがない。看護婦に聞くと点滴液の中の薬はアミノフィリンだということだった。これは私が発病したときよく使った一般薬ではないか。内心訝しく思った。この病院には呼吸困難を和らげる特別の薬はないのか? 私は思わず病院や医者にこう言いたかった。「特効薬があるはずです、肺疾患の患者を救ってください、茅公を救ってください!」

私は不安になって涙を浮かべた目で病室を行ったり来たりした。涙で曇った視界の中に、茅公が起き上がった姿が見えたような気がした。あ那时的のように、生き生きとした優しい顔をしていた……

1979年の晩春、私たちは10年の動乱を経て、交道口（北京市東城区にある地名）にある彼の家で再会を果たした。互いに喜び、余生があることを心から祝った。

彼は、「文革中に君が亡くなったという噂を聞いて涙を流しのだよ」と言い、私は「九死に一生を得たのですよ」とこたえた。そのあと彼は、これからも社会主義文学のために書き続けるよう私を励まし、私も再びペンを取ることを約束した。私はそのとき上海にいて精神的にあまり良くない状況にあったので、第四回文代会には出席するつもりはなかった。だが彼は、「君は絶対に参加しなければならない、私は『祝文芸春天』という題辞を君のために書いた。君に会ったときに渡す」と書いて、私の参加を促した。

新中国建国前のように、彼はいつも私が文学の創作と編集の仕事をするようにと導き支えてくれた。彼はいつも自分の著述を勤勉に続けているだけでなく、時間を作っては何人かの作家仲間と一緒に、祖国の強い作家部隊を作るために、熱心に新人作家を指導した。

彼はそのように懐の広い、遠くを見ることのできる正直で無私の心を持つ文学界の大師だ。“五四”のあとに魯迅や郭沫若と共に、祖国における革命文学のために突出した業績を残した功労者だ。

突然茅公が私の名を呼んだ。私がすすり泣いているのに気づいたのかもしれない。まるで私を泣き止ませるかのようなようだった。私は急いで涙を拭き、向きを変えて彼のベッドの前に行き、彼が食事するのを見ていた。驚いたことに食欲はあり、看護師が小さな茶碗一杯の粥と茶碗半分ほどの茶碗蒸しを、さらにバナナ一本とミカン半分を食べさせた。

これで私の頭の中には、食欲がありさえすれば危機は十分乗り越えられる、という楽観的な考え方が浮かんできた。私は彼が食事を終わるまで待ち、彼に休息をとってもらうためにいとまごいをし、翌日にまた会いに来ると言った。彼と私はしっかりと握手をした。彼は穏やかな目つきをしていて、これが彼との最後の握手となるなどは思ってもみなかった。

翌日の明け方、小曼が電話をかけてきて、茅公が5時55分にこの世を去ったと告げた。祖国の文壇の光輝く巨星が落ちた！

私と李棣華たちが病室に着いた時、茅公の遺体はちょうど送り出されようとしていた。彼は熟睡しているような安らかな顔をしていた。額には汗の跡があり、彼が必死に闘ったことは明らかだった。ああ、茅公はついに病魔に打ち勝つことができな

ったのだ！私は沈痛な声で「茅公」と呼んだが、返事はなかった。前日の昼、彼が食事をしていて情景を思い出した。私には信じられない。彼がほんとうに、親戚や友人たちを残してこの世から離れてしまったなどとは！

一九八一年五月二十日

本作品の題名の原文は「春蚕絲未盡」で、趙清閣が愛読していた女流詩人李商隱(813～858)の「春蚕到死絲方盡、蠟炬成灰淚始乾。」から採られている。「春の蚕は死ぬまで糸を吐きつづけ、ろうそくは燃え尽きるまで蠟の涙を流す。あなたを想う心は死ぬまで変わらない」という意味。

茅盾は、中華人民共和国成立後は文学界の指導者として活動し、文革では批判され一時消息不明になったが、毛沢東の葬儀のときに葬儀委員として表舞台に顔を見せ、その後は人民政治協商会議全国委員会副主席などの要職を兼任し、政治手腕を発揮した。

彼が発表した短編小説『春蚕』には江南における繭の暴落によって苦境に追い込まれていった農民や小商人の姿が描かれている。この作品は発表された翌年の1933年に映画化されている。

